

発達支持的生徒指導における、 学級ファシリテーターの役割と効果 ー児童生徒の受容感・有用感・相互扶助を意識した支援ー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 平賀治利

1. 問題の所在

(1) 多様な学級の実態

内閣府 society5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ(2021)において、「認識すべき教室の中にある多様性・こども目線の重要性(小学校のイメージ例)」が示されている。その中で、小学校35人学級のうち、発達障害の可能性のある子どもはおよそ2.7人、ギフテッドのある子どもはおよそ0.8人、不登校及び不登校傾向のある子どもはおよそ4.5人、家にある本が少ない子どもは10.4人、家であまり日本語を話さない子どもは1.0人と示されている。内閣府の調査から、学級では、様々な特性や関心・意欲を持った子ども達が在籍していることがわかる。そのため、多種多様な子ども達が集まる学級において、児童生徒が主体的によりよいクラスを創っていくためには、教師によるアプローチが必要になってくると考える。

(2) 国が示している方向性

生徒指導提要(2023)において「学級・ホームルーム経営では、児童生徒自身が学級や学校生活、人間関係をよりよいものにするために、皆で話し合い、皆で決めて、皆で協力して実践することを通じて、学級・ホームルームの友達のよいところに気付いたり、良好な人間関係を築いたり、学級・ホームルームの雰囲気がよくなったりすることを実感することが大切」と示されている。また、平成29年告示の中学校学習指導要領解説

【総則編】では「教師と生徒の信頼関係及び生徒相互理解のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図る」と示されている。さらに、平成29年告示の中学校学習指導要領解説【特別活動編】では「個々の生徒についての理解を深め、教師と生徒、生徒相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図る」と示されている。つまり、よりよい学級を創っていくためには、児童生徒がお互いを認め、励まし合い、支え合うことを通して、一人一人が学級での存在感を実感し、個々の人間関係の結びを強く持つことに加え、教師と生徒、生徒相互の信頼関係を構築していくことが求められている。

(3) 本研究の着眼点

そこで、児童生徒が主体的によりよい学級を創っていくためには、教師による発達支持的生徒指導と学級ファシリテーションを用いたアプローチが必要であると考え。生徒指導提要(2023)において、発達支持的生徒指導は「教育課程内外の全ての教育活動において進められている生徒指導の基盤であり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に実現していく上で、特に、発達支持的生徒指導の考えを生かすことが不可欠である」とされている。また、工藤(2012)では「令和3年1月26日中教審答申において、子供たちの可能性を引出し、個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指すにあたり、教師に求められる能力として「ファシリテーション能力」が追記され、重要視されている」

と述べている。さらに、中野（2003）では「教え指導するリーダーシップから、子どもたちの意欲や主体性を育み支援する新しいリーダーへの転換が迫られている」と述べている。つまり、一方的に教え込むのではなく、児童生徒が自発的・主体的に取り組むための支援が、教員に求められているといえる。さらに、清水（2021）では「児童生徒が安心して話せる環境をつくる」効果や「教師との関係性を構築し、安心感を与える」効果がある」と述べており、「・発言者にとって、友人の聞く姿勢から得られる安心感は大きい。・教師が率先して聞く姿勢を見せることで発言者への安心と他生徒へのモデリング効果が与えられた。」と述べている。また、坂井・榊原（2021）では「児童が協働できるような場を設けたことで、学級に、互いに助け合う、協力し合う雰囲気醸成されたことが示唆された。児童がA教諭模倣して、友達に言葉をかけたり拍手をしたりするようすが随所見られた」と述べている。これらのことから、児童生徒が主体的によりよい学級を創っていくためには、発達支持的生徒指導を通して、教員が学級ファシリテーターとしての役割を担い、児童生徒を支援導いていくこと、また、教師からの言葉がけが児童生徒の主体性の向上に繋がり、よりよい学級が醸成していくのではないかと考える。さらに、よりよい学級を醸成していく中で、児童生徒が受容感・有用感・相互扶助を感じることが大切になってくると考える。竹井（2022）は、「居心地の良い状態では児童の「自己受容感」が高まり、結果として、自他尊重が生起された」と述べている。また、生徒指導提要（2023）では、「ありのままの自分を肯定的に捉える自己肯定感や、他者のために役立った、認められたという自己有用感を育むことは極めて重要。」や「自他の個性を尊重し、相手の立場に立って考え、行動できる相互扶助的で共感的な人間関係をいかに早期に創りあげるかが重要となります」と示されている。

以上のことから、教師からの言葉がけや行

動は、児童生徒に影響を与え、よりよい学級を児童生徒が創っていくためには、教師からのアプローチが必要になっていくのではないかと考える。

2. 研究の目的

本研究では、学級ファシリテーターとしての教師の働きかけを通して、児童生徒の受容感・有用感・相互扶助を意識した支援を行い、児童生徒がよりよい学級を自ら創っていくための教師のアプローチを明らかにしていく。

3. 研究の方法

<調査期間>

令和6年5月17日から9月26日

<調査対象>

山梨県内公立中学校2学年に所属している

・生徒28名（アンケート調査では25名を対象）

・学級担任1名

<調査方法>

○理論研究

本研究のキーワードである「発達支持的生徒指導」と「学級ファシリテーター」に関する理論研究を実施し、データ及び情報収集を行った。その中で、本研究では「発達支持的生徒指導」「学級ファシリテーター」を以下のよう

・発達支持的生徒指導

「児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、教職員は児童生徒の個性の発見・良さや可能性の伸長・社会的資質能力の発達を支えるように働きかける。」とする。生徒指導提要（2023）

・学級ファシリテーター

「参加者に直接的に指示を与え教え込む『指導』ではなく、参加者双方向のやりとりを大切に

グループの能力を十分に発揮できるように支援しながら導く『支導』する人（指導者）」とする。工藤（2012）

○実習中の観察

実習中における教師及び生徒の観察を行った。対象クラスの学級担任による生徒に対する言葉かけ、行動、活動形態を観察し記録した。また、教員からの言葉かけによる生徒の様子や変化、個々の反応を観察し記録した。対象クラスの学級担任の言った言葉かけを以下の3つに分類した。

①児童生徒が受容感を抱く言葉かけ

例：よく頑張った。凄かったよ。

②児童生徒が有用感を抱く言葉かけ

例：～のおかげでクラスが1つになってきたよ。

③相互扶助に関わる言葉かけ

例：一緒にやろう。手伝うよ。

また、石川・小貫（2015）によれば、「ファシリテーション型教師は、学習者同士で学び合う過程において引出されるものであるため、教師の発言量はすくなくなる」とある（表1）。そこで、学級担任の発言量の変化にも着目して観察を行った。

表1 従来型の教師とファシリテーション型の教師の比較

	従来型の教師	ファシリテーション型の教師
求められる教育形態	トップダウンの教育、ピラミッド型	ボトムアップの教育、ネットワーク型
学習内容と過程	知識や情報を与え、内容をより充実させていく	予定していた内容とそれをきっかけとして気づく想定外の内容とがある
実践者の発言量	予定した学習内容を伝え教えることが重視されるため、発言量が多くなる	学習者同士で学びあう過程において引き出されるものもあるので、発言量は少なくなる
立ち位置	意見をコントロールすることで結論へ結びつける	学習者なりの結論にいたる案内をする
集団への介入	自分の力で場を盛り上げる	集団の力で場を盛り上げる
雰囲気づくり	結論ありきの空気が醸し出されるため、（反対）意見が言い出しづらくなる	全員の意見が尊重されるため、何を言ってもいい、安心安全な場が保証される
リーダーシップ	集団を先導するような力強さ	集団を活かすしなやかさ
参加感	発言できなかった学習者への対応が不十分になりがちで、疎外感を覚える	何かしら場に貢献できる存在として捉えられるため、「いてもいい」という安心感を覚える

出典：石川・小貫「教育ファシリテーターになろう」 弘文堂

○アンケート調査

学園祭期間開始時と学園祭終了後にアンケート調査を行い、学園祭前後の生徒の変化を見取った。以下、表2と3に二つのアンケートを提示する。

表2 事前アンケート

番号	質問	4	3	2	1
1	他者の意見に流されず、自分の考えをもち行動している。				
2	課題に対して友人と協力して取り組んでいる。				

3	学校行事やクラス活動に意欲的に参加している。				
4	クラスの中で、緊張や気負いすることなく生活している。				
5	クラスの中で、自分らしさを保ちながら過ごしている。				
6	担任の先生に、自分の考えや思いを伝えている。				
7	物事を自分で判断し、行動している。				
8	クラスの友人と信頼関係を築けている。				

9	学園祭の取り組みの中で、クラスにどのように貢献していきたいですか。	
---	-----------------------------------	--

	に思い、感じましたか。	
--	-------------	--

表3 事後アンケート

番号	質問	4	3	2	1
1	他者の意見に流されず、自分の考えをもち行動している。				
2	課題に対して友人と協力して取り組んでいる。				
3	学校行事やクラス活動に意欲的に参加している。				
4	クラスの中で、緊張や気負いすることなく生活している。				
5	クラスの中で、自分らしさを保ちながら過ごしている。				
6	担任の先生に、自分の考えや思いを伝えている。				
7	物事を自分で判断し、行動している。				
8	クラスの友人と信頼関係を築けている。				
9	学園祭の取り組みの中で、あなたはクラスにどのように貢献できましたか。				
10-1	学園祭期間中、あなたが先生や友人からかけてもらった言葉で嬉しかった言葉や励まされた言葉があったら教えて下さい。				
10-2	その言葉かけによって、あなたはどのよう				

○学級担任へのインタビュー調査

実習最終日、学級担任へのインタビューを実施した。

4. 結果と考察

○観察からの結果と考察

実習中の観察より、データの収集を行ったところ、以下のような変化が見られた。

・教師による言葉がけの変化

観察の中で、学級担任の発言量に着目したところ、学園祭期間開始時と学園祭終了時までの学級担任からの発言量が減少していることが観察時のメモを通して分かった。また、学園祭開始時には、学級担任からの言葉がけが多く見られた。例えば、体育部門の練習を行う際には「スピーディーに！スピーディーに！」といった時間を守らせるような声掛けが見られた。また「記録を狙うから円陣！円陣！」や「乱さない練習、集中！集中！」といった生徒のやる気や練習に取り組む姿勢を高まらせる声掛けを学級担任が主体となっていた。しかし、学園祭期間が進むにつれ、生徒から生徒への言葉掛けが多く見られるようになり、教師からの発言量は減少していった。学級担任へのインタビュー調査の中で「子どもが主体であること」「生徒が納得して決める」「クラスのことを考えて答えを出す」と話されている。実際に、学級担任からの発言量は減少していたが、各部門の責任者となる生徒に対して、学級担任が提案をし、責任者が学級全体へ提案をしている様子が見られた。そのことについて、学級担任のインタビュー調査の中で「生徒が考え、クラスのことを考え、答えを出させたかった。」と述べている。つまり、学級担任は生徒の考えや意見を尊重し、生徒の主体性を育む意図を持ち、アプローチしていたことが分かる。これは、ファシリテーター型教師としてのアプローチであると考えられる。

（実践者の発言量：（表1））このように、学級担任によるアプローチによって、生徒が主体的に活

動し、生徒間で考え、行動ができるようになっていった。

学園祭期間開始時、対象となる学級で事前アンケートを実施したところ、以下のような結果が見られた。

○アンケートからの結果と考察

1, 事前アンケートの結果と考察

表4 事前アンケートの結果

番号	項目	4 当てはまる	3 少し当てはまる	2 あまり当てはまらない	1 当てはまらない
1	他者の意見に流されず、自分の考えをもち行動している。	5	17	2	1
2	課題に対して友人と協力して取り組んでいる。	15	9	1	0
3	学校行事やクラス活動に意欲的に参加している。	18	7	0	0
4	クラスの中で、緊張や気負いすることなく生活している。	8	14	3	0
5	クラスの中で、自分らしさを保ちながら過ごしている。	13	11	1	0
6	担任の先生に自分の考えや思いを伝えている。	15	7	2	1
7	物事を自分で判断し、行動している。	15	10	0	0
8	クラスの友人と信頼関係を築けている。	21	1	3	0

表4から、質問項目1「他者の意見に流されず、自分の考えをもち行動している。」と質問項目4「クラスの中で緊張や気負いすることなく生活している」のみ「当てはまると回答した生徒より「少し当てはまる」と回答した生徒が多くなっていることがわかる。このことから、クラス内で気負いや緊張を感じることがあり、自主性をあまり出すことができない生徒がいると考えられる。

質問項目6「担任の先生に、自分の考えや思いを伝えている。」という質問に対しては、多くの生徒が「当てはまる」と回答したが、「あまり当てはまらない」や「当てはまらない」と回答した生徒が少数いることが分かる。このことから、一部生徒は学級担任に考えや思いを伝えられることができていないと考えられる。

質問項目8「クラスの友人と信頼関係を築けてい

る。」という質問に対して、「当てはまる」と回答した生徒が多く見られた。このことから、学級内の友人関係は良好であるといえる。

事前アンケートの結果から、生徒はクラス内で気負いや緊張を感じることがあり、自主性を出せていないのではないかと考える。

事前アンケートの記述質問「あなたはクラスにどのように貢献していきたいですか。」について、「自ら声掛けをしていく」「自分の意見を言い、みんなの意見を聞きながら最高の結果を残す」「周囲を見て、自分で考え、みんなに伝え行動していく」「協力している姿を見せる」といった自ら行動していくことや周囲との連携を図っていききたいといった回答が多く見られた。その中で「足手まといにならないように頑張る」「迷惑を掛けないように頑張る」といった回答も見られた。質問項

目4の回答結果を踏まえると、クラス内で緊張や気負いを感じている生徒は少数いることがわかる。以上の結果から、他者の意見に流されやすく、自身の考えや思いを伝えることがあまり得意ではない生徒が多いと考えられる。また、クラスの

中で緊張や気負いを感じる生徒がおり、周囲に気を遣っているのではないかとアンケート結果から考えることができる。

2. 事後アンケートの結果と考察

学園祭終了後、対象となる学級で事後アンケートを実施したところ、以下のような結果が見られ

た。

表5 事後アンケートの結果

番号	項目	4 当てはまる	3 少し当てはまる	2 あまり当てはまらない	1 当てはまらない
1	他者の意見に流されず、自分の考えをもち行動している。	5	18	2	0
2	課題に対して友人と協力して取り組んでいる。	18	5	2	0
3	学校行事やクラス活動に意欲的に参加している。	18	6	1	0
4	クラスの中で、緊張や気負いすることなく生活している。	8	15	2	0
5	クラスの中で、自分らしさを保ちながら過ごしている。	14	10	1	0
6	担任の先生に自分の考えや思いを伝えている。	14	10	1	0
7	物事を自分で判断し、行動している。	16	9	0	0
8	クラスの友人と信頼関係を築けている。	20	5	0	0

学園祭期間が終了し、質問項目1「他者に流されず、自分の考えをもち行動している。」と質問項目4「クラスの中で緊張や気負いすることなく生活している。」と回答した生徒の割合が「当てはまる」と回答した生徒より「少し当てはまる」と回答した生徒の割合は事前アンケートの結果と比べ、あまり変化は見られなかった。しかし、「当てはまらない」と回答した生徒が全項目0人となり、学園祭期間前後で変化が見られた。

質問項目6「担任の先生に自分の考えや思いを伝えている。」に対し「当てはまる」「少し当ては

まる」と回答した生徒が事前アンケートの結果と比べ増えていることが分かる。この結果は、学級担任へのインタビュー調査の中で、生徒への配慮として「子ども達をよく見ること。頑張りを視覚化すること。コミュニケーションを図り、担任は近い存在であると認識させること。」と話されていることに関連している。つまり、生徒と積極的なコミュニケーションを図り、よく観察し、頑張りが変化に気づいてあげることが信頼関係を構築していく上で重要であると考えられる。

質問項目8「クラスの友人と信頼関係が築けて

いる」に対し、「当てはまる」「少し当てはまる」と回答した生徒が事前アンケートの結果と比べ、増えていることが分かった。これは、教師によるアプローチが大きく影響していると考ええる。学級担任へのインタビュー調査の中で目指す学級像を「一生懸命。こだわり。思いやりを持ったクラス」と話されている。また、生徒に求めることとして「注意し合う。認め合う。フォローし合う。」と話されている。このことから、日頃から生徒に対して学級担任の思いを伝えていくことが重要になっていると考えられる。また、学園祭練習期間を通して、教師が率先して行っていた言葉かけや勝利にこだわる様子がクラス全体を前向きに導いていると考えられる。それは、学級担任へのインタビュー調査の中で、生徒に求めることについて「何事にもこだわる。一生懸命取り組む。」と話されている。また、観察を通して、生徒が主体となり、考え、実行していく場面が見られた。このことから、教師と生徒のみならず、生徒相互の信頼関係が構築されたのではないかと考えられる。

事後アンケートの記述質問「あなたはクラスにどのように貢献できましたか。」に対し、「他部門を手伝うことができた」「種目リーダーとして、競技について調べ、伝えることができた」「団長として積極的な声掛けができた」「学級委員長として、クラスを引っ張れた。まとめられた」といった自身の役割を果たし、仲間のために取り組むことができたといった回答が多く見られた。一方、学園祭期間中の観察では、学級担任は熱意や、やる気を持って指導していた。これは、学級担任へのインタビュー調査において「教員が気合いを入れる。教員も本気であることを伝える」と話されていることからわかる。また、観察から「人間間違いがあるから気にしない」や「〇〇頑張ったぞ!」「頑張っていたからいいよ!」といった生徒が前

向きになる言葉かけや、頑張りを認め、受容感を抱くような言葉かけが多く見られた。

事後アンケート、観察、インタビューの結果から、教師が熱意ややる気をもって指導し、前向きな言葉かけや、受容感を抱く言葉かけを行ったことが、生徒の主体性の向上に繋がったのではないかと考えられる。

3. アンケート結果からの言葉かけの分類

事後アンケートの記述問題「学園祭期間中、あなたが先生や友人からかけてもらった言葉で嬉しかった言葉や励まされた言葉があったら教えてください」について、3つの観点で分類を行い、以下の結果が見られた。

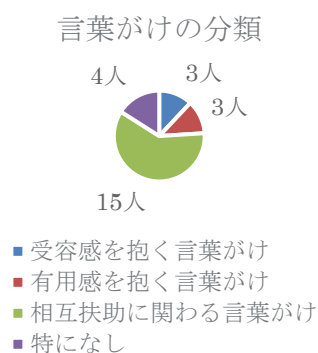


図1 言葉かけの分類結果

以上の結果から、「相互扶助に関わる言葉かけ」に分類される言葉をかけられると嬉しさや励ましを感じる生徒が多いことが分かった。そのため、相互の助け合いや前向きな言葉かけが重要であるといえる。つまり、相互扶助に関わる言葉かけを行うことが生徒にとっての支えとなり、前向きな姿勢を醸成していくことに繋がり、有効な手立てであるといえる。以下に、回答された言葉かけとそれに対して生徒がどのように感じたのか明記する。

表6 言葉かけの分類とその内容

言葉かけの分類	かけられた言葉	その言葉かけを受けて感じたこと
受容感	・「頑張って!」	・嬉しい。成功させてみせると思った。

	～ならできるよ」 ・よく頑張った。	・もっと頑張ろうと思った。
有用感	・「～のおかげでクラスが1つ になってきたよ。」 ・「すごかったよ、お疲れ様」	・これからも頑張りたいという気持ちになった。 ・頑張って良かった。クラスに力になれたかなと少し誇らしい 気持ちになった。
相互扶助	・「まだまだいけるよ」 ・「～ならできるよ。」 ・「頑張れ。」 ・「みんなで勝とう。 集中」 ・「失敗は誰にでもあるから大 丈夫だ」 ・「一緒にやろう、手伝うよ。」	・さらに前へ進みがんばろうと思った。 ・勇気をもらった。 ・学園祭全勝の気持ちが強くなった。 ・優勝できるように頑張ろうと思った。 ・失敗してもいつか成功に繋がると思った。 ・嬉しかった

表6の結果から、受容感を抱く言葉がけ、有用感を抱く言葉がけ、相互扶助に関する言葉がけは、生徒を前向きな気持ちにさせていることが分かる。つまり、3観点の言葉がけにより生徒の主体性の向上に繋がり、教師のアプローチとして必要不可欠であると言える。

5. まとめ

本研究では、学級ファシリテーターとしての教師の働きかけを通して、子ども達の受容感・有用感・相互扶助を意識した支援を行い、児童生徒がよりよい学級を自ら創っていくための教師のアプローチを明らかにしてきた。様々な特性を持つ学級において、生徒の主体性を向上させよりよい学級を創っていくためには教師によるアプローチが必要不可欠になっている。学級担任が率先して声掛けを行う事により、生徒は学級担任を模倣し、生徒相互で主体性を向上させていくことができるようになってくる。その際、学級担任は、生徒の意見や考えを尊重し、支えていくことが重要になってくることがわかった。さらに、教師からの言葉がけにおいて、受容感、有用感、相互扶助を意識することで、生徒の主体性の向上に繋がることが分かった。今後の展望として、様々な特性を持つ子ども達に対し、学級担任がファシリテーターとなり、支え導いていくことが子ども達の主体性向上に繋がっていくため、子ども達をどのよ

うに支援し、導いていくのか考えていく。また、授業実践の中で、学級ファシリテーターとしての効果と役割についても考えていきたい。

6 参考文献

- ・文部科学省 中学校学習指導要領解説【総則編】
- ・文部科学省 中学校学習指導要領解説【特別活動編】
- ・文部科学省 生徒指導提要（2023）
- ・内閣府 society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ（2022）
- ・工藤亘「令和の日本型教育に求められる教師のファシリテーション能力についての考察」
- ・坂井華・榊原範久「児童の居場所づくりのための学級担任の働きかけによって創られる学級のエスノグラフィー」（2021）
- ・清水祐介「授業における教師のファシリテーションの役割と効果」（2021）
- ・中野民夫「学び合う場の作りかた：本当の学びへのファシリテーション」（2003）
- ・岩瀬直樹・ちよんせいこ「よくわかる学級ファシリテーション①」解放出版社
- ・長友紀子「学級ファシリテーションの視点からの学級経営方法の開発」（2019）
- ・石川一喜・小貫仁「教育ファシリテーターになろう」弘文堂（2015）